

【プロローグ】

「お前は勇者にはなれんよ」

じいちゃんのその言葉を聞いた瞬間、全身から血の気が抜けていくようだった。

「な、なんでさ。そんなのやってみなきゃ……」

「やらんでも分かるわい。だってお前向いとらんもん」

いくら先代の勇者だからって何がわかるんだ、と思った。

自分で言うのもなんだが、俺だって頑張ってきた、つもりだ。

かの魔王の首を一撃で両断した程の剣の腕前を持つじいちゃんから剣術を学び、魔法だって一通り覚えた。日々の鍛錬だって欠かしたことは無い。

なのに、なんで、おじいちゃんは――

「それにな……」

「もういいよ！！」

じいちゃんが再び何かを言いかける前に俺はその場から逃げるように駆け出した。

じいちゃん――あの最悪の魔王の首を取った史上最強の勇者を、これ以上何かを聞くことで嫌いになりたくなかったから。

――というのは建前で、本心からいえば俺の、自分自身の小さなプライドを守るためだったと思う。

「こりゃ待て！ レオン！！」

じいちゃんが俺を呼ぶ。

――待たない、待つはずがない。

取るに足らない、小さなプライドを傷つけられた俺は無謀にも家を出た。

もう二度と、帰ってくるものかと。

[場面転換、走る演出]

外は雨だった。

泥濘んだ地面を蹴るたびに泥が飛ぶが、気にせず走った。

生まれ育った村を今まさに出ようとする直前、昔馴染みの婆さんに声をかけられた。

「あら、勇者様のとこのお孫ちゃん。こんな雨の中どこへ——」

その言葉を振り切るように、俺は婆さんを見捨てて思い切り村の出口を駆け抜ける。

違う。

違う。

違う——！

俺の小さなプライドに付いた傷口が、ずきずきと痛むたび、湧いた怒りが脚に力を増していく。

俺は「勇者の孫」なんて名前じゃない！

どいつもこいつも、俺のコトなんて見ちゃいないんだ。

じいちゃんの、勇者の栄光が、俺の存在を根こそぎかき消している。

だったら、なるしかないじゃないか。勇者か、それと同じか、それより大きい何かに。

俺は雨なのか涙なのか分からないくらいに濡れてぐちゃぐちゃになった顔で叫んだ。

「——俺は！！」

俺はここにいるぞと、

「俺の、俺の名前は！！」

存在証明を、生の証を叫ぶように。

「レオンハルト・ノットガイルだ！！」

【Chapter.01】